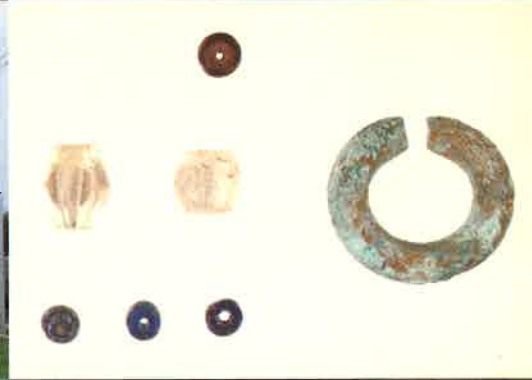


取手市埋蔵文化財センター開館記念企画展

土の中からの物語

取手の原始古代の主な遺跡と出土品



平成11年9月2日木 - 10月15日金

◎開館時間 午前9時から午後5時
(入館は4時30分まで)

◎期間中無休

◎入館無料

取手市埋蔵文化財センター

〒302-0007 茨城県取手市吉田383

TEL 0297-73-2010

FAX 0297-73-5003

開催にあたって

このたび取手市埋蔵文化財センター開館記念企画展「土の中からの物語 取手の原始古代の主な遺跡と出土品」が開催される運びとなりました。

市内には現在78か所の遺跡がありますが、この中には中妻貝塚のように明治時代からその名が知られ、研究者によって発掘されてきたものもあります。また取手市でも埋蔵文化財の保護と調査・研究を進めてきましたが、平成元年にはその成果の集大成として『取手市史』原始古代(考古)資料編も発行されています。さらに平成4年には「埋蔵文化財の取扱い要領」を定め、県内の他市町村に先がけ大規模な開発や遺跡内での住宅の建築などの際には、必ず事前に埋蔵文化財の調査をおこなってきました。こうして出土した遺物には、研究者のみならず広く人々の注目を集めたものも、少なくありません。

しかしこれまで出土してきた多くの遺物は、市民の皆様目に直接ふれる機会がほとんどありませんでした。今回の企画展で展示されるものは、全体から見れば数は少ないものの、各時代の代表的遺跡から出土した重要な遺物を選びすぎたものです。

土の中から発掘されたこれらの品々から、遠い私たちの祖先の暮らしや文化に想いを馳せ、これからも取手市の文化財行政に一層の御理解と御支援をたまわりますよう、お願い申し上げます。

平成11年9月

取手市埋蔵文化財センター

■ 開館時間 …………… 午前9時から午後5時
入館は午後4時30分まで

■ 期間中無休

■ 入館無料

■ 記念講演 ……「縄文時代の取手」

財団法人茨城県教育財団

瓦吹 堅氏

日時：9月11日(土) 午後2時～午後3時30分

会場：埋蔵文化財センター2階講座室

定員：40名

例言

1. このパンフレットは、平成11年9月2日から10月15日まで開催される取手市埋蔵文化財センター開館記念企画展「土の中からの物語 取手の原始古代の主な遺跡と出土品」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の本橋弘美が担当しました。
3. 企画展の開催とパンフレットの発行に当っては、財団法人茨城県教育財団と川口武彦氏からご指導・ご協力をいただきました。

取手市考古年表

年 代		取手市の主な遺跡			
60万年前	旧石器時代	柏原遺跡(野々井)			
B.C.11000 (紀元前)	縄 文 時 代	海 進 ↓ 海 退			
B.C.8000			草創期	大渡Ⅰ・Ⅱ遺跡(野々井)	
B.C.6000			早期		
B.C.4000			前期		向山貝塚(下高井) 西方貝塚(小文間)
B.C.2000			中期		台宿貝塚(台宿) 中妻貝塚(小文間) 神明遺跡(下高井)
B.C.1000	後期				
B.C.300 0	晩期				
A.D.300 (紀元)	弥生時代	東原遺跡(野々井) 柏原遺跡(野々井)			
A.D.600	古墳時代	大山Ⅰ遺跡(寺田) 大渡遺跡(野々井) 稲向原Ⅱ遺跡(稲) 市之代古墳群(市之代) 糠塚古墳群(上高井)			
A.D.700	飛鳥時代	台宿二本松遺跡(台宿)			
A.D.800	奈良時代				
A.D.1200	平安時代	北中原遺跡(井野) 下高井向原Ⅰ遺跡(下高井) 平将門の乱			
A.D.1400	鎌倉時代 南北朝時代				
	室町時代	16c初頭に三仏堂(現在龍禅寺)を建立 下高井城跡(下高井) 大鹿城跡(白山)			
	戦国時代				

1. 旧石器時代

人類が道具を使うことを覚えた時、選んだものはまず石や動物の骨でした。それらの石や骨は、槍やナイフなど狩猟に使われるものが多くみられます。

槍やナイフは、石を打ち割って尖らせて作られたので総称して打製石器と呼ばれ、打製石器を使っていた時代のことを旧石器時代といいます。

日本では、人類が住み出した60万年前から、土器が普及する紀元前1万2千年前後になります。この時代はまだ氷河期にあたり、取手市周辺は現在の北海道より寒かったといわれています。

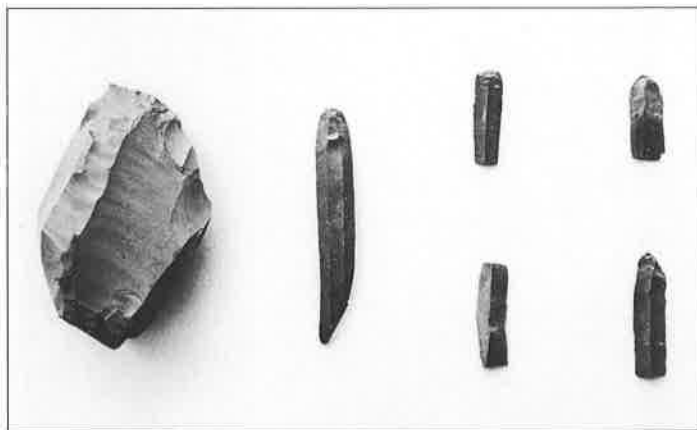
取手の旧石器時代

旧石器時代は狩猟中心の生活で移動が多いためか、遺跡の規模は小さく、他の時代の遺跡とちがって関東ローム層やそれより下(洪積層)にあるため、発見されにくい遺跡です。取手市でも、西方貝塚(小文間)や大渡Ⅰ遺跡(野々井)などの発掘調査で旧石器時代の石器や破片が見つかっており、市内にもきっと旧石器の遺跡があるだろうと思われていました。そして、ついに平成7年に実施された柏原遺跡(野々井)の発掘調査の際に石器を製作した跡が5ヶ所発掘されました。製作された石器は細石刃と言われる刃物で、紀元前1万3千年から1万2千年頃の旧石器時代後期に使われたものです。

現在、市内の旧石器遺跡は柏原遺跡だけですが、旧石器時代の石器は前述の2遺跡のほか、台宿二本松遺跡(台宿)や市之代古墳群(市之代)など市内各所で発見されています。今後の調査によって、次第に市内の旧石器時代が明らかになっていくでしょう。



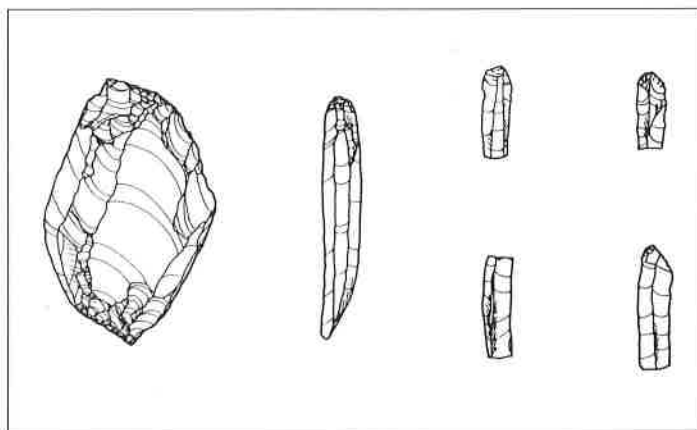
柏原遺跡発掘調査風景 (写真 茨城県教育財団)



左から細石刃核、細石刃(完形)、細石刃(4片) 柏原遺跡出土



左側・中央下 ナイフ型石器、中央上 尖頭器、右側 有舌尖頭器
柏原遺跡出土



右上細石刃 実測図 (茨城県教育財団作成)

2. 縄文時代

旧石器時代からの打製石器に加えて、土器や磨製石器(研いだり磨いたりして作る石器)を使用した時代を縄文時代と呼びます。紀元前1万1千年から弥生時代が始まる紀元前3百年位までの、約1万年という長い期間です。

旧石器時代とは異なり、定住型の狩猟社会であったようで、大規模な集落や貝塚が全国で数多く確認され、地域差も顕著に表れています。

縄文時代の遺跡は一般的にもよく知られているものが多く、また古くから調査・研究されてきました。近代日本考古学の父と言われるモースによって初めて発掘調査された大森貝塚(東京都)や、日本人が最初に発掘調査した陸平貝塚(美浦村)も縄文時代の遺跡です。

また、三内丸山遺跡(青森県)のような最近の大規模な発掘調査では、今までの認識を覆す発見が数多く発表され、縄文時代は私たちが思っている以上に発達した社会だったということがわかってきました。例えば、農耕は弥生時代になってからと思われていましたが、三内丸山遺跡から出土したクリの実を調べたところ、栽培種であることがわかりました。また、各地で米の存在を裏づける遺物が発掘されています。

取手の縄文時代

約1万年も続く縄文時代は、一般的に草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に区分されます。



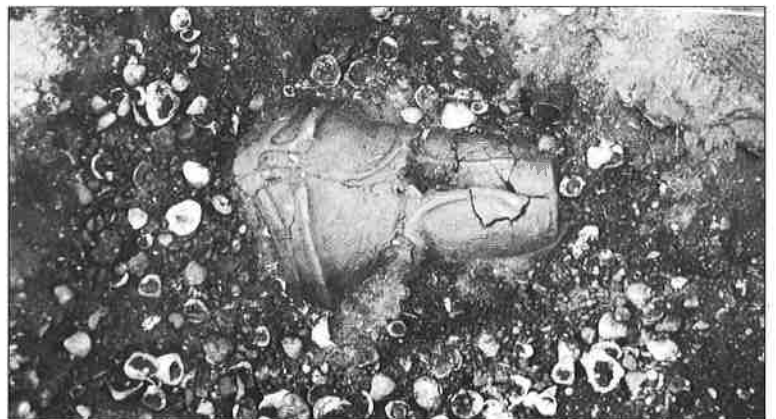
中妻貝塚貝層



縄文土器(中期深鉢) 西方貝塚出土



縄文時代中期の住居跡 新屋敷遺跡



右土器出土状況

草創期は、旧石器時代の移動型社会から定住型社会に移行する過渡期にあたり、全国的に遺跡、遺物ともごく少数で、取手市周辺では守谷町で土器片が出土しています。

早期に入ると定住化が進み、小規模ながら集落と言えるものが作られます。その1つの要因として、気候の温暖化による海面の上昇(海進)があると考えられます。入り江が増え、漁労や貝の採集が大きなウェイトを占めるようになり、それまでより定住しやすくなったのでしょう。取手市内では早期の終わり頃から人々の痕跡が多くなり、大渡遺跡ではファイヤーピットと呼ばれる炉の跡と土器、そして少量の貝が発掘されています。

前期に入ると、土器の器種や文様が多様化します。生活基準がより高くなったことが窺えるでしょう。市内では、向山貝塚(貝塚)や、椿山・大日原遺跡など小貝川に面した台地上に多く形成される特徴があります。また、西方貝塚(小文間)は前期後半から中期の前半まで長期に渡って形成された貝塚です。

中・後期には太平洋側の各地で大規模な貝塚が作られます。また、土器がとても装飾的になり、特に中期、北陸では火焰土器のように有名な土器が作られました。市内にも中妻貝塚(小文間)などの大規模な貝塚が形成され、中妻貝塚は晩期まで続いています。

縄文時代は、取手市内において最も遺跡の分布が多く、42遺跡を確認しています。南北に利根川と小貝川が流れるため海面の上昇や下降(海進・海退)による豊富な水産資源や温暖な気候に恵まれ、発展していったのでしょう。



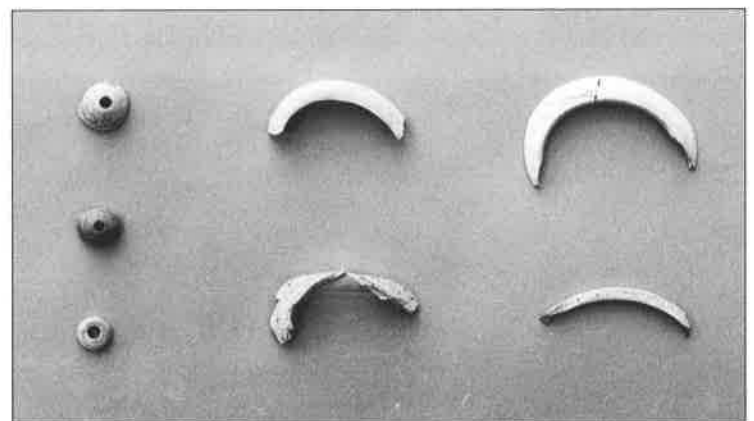
上から土偶(3点)、土製耳飾(3点)、土製円盤(2点) 中妻貝塚出土



縄文土器(晩期注口土器)
中妻貝塚出土



縄文土器(中期深鉢) 西方貝塚出土



左から貝玉(3点)、貝輪(4点) 中妻貝塚出土

3. 弥生時代

弥生時代は縄文時代と違い、大陸からの影響を多分に受けた時代です。

紀元前3百年ごろに大陸から多数の渡来人と一緒に、水田を使う稲作農耕や青銅器・鉄器が伝わりました。また、それに前後し土器も縄文土器と異なった器形や風合いを持つ弥生土器に変わります。これが弥生時代のはじまりとされています。この頃からほぼ現在と同じ気候になったので、水稲の農耕が発達したのではないのでしょうか。弥生時代の遺跡は九州地方が最も早く、西日本を中心として発達し、だんだんと北上していきます。

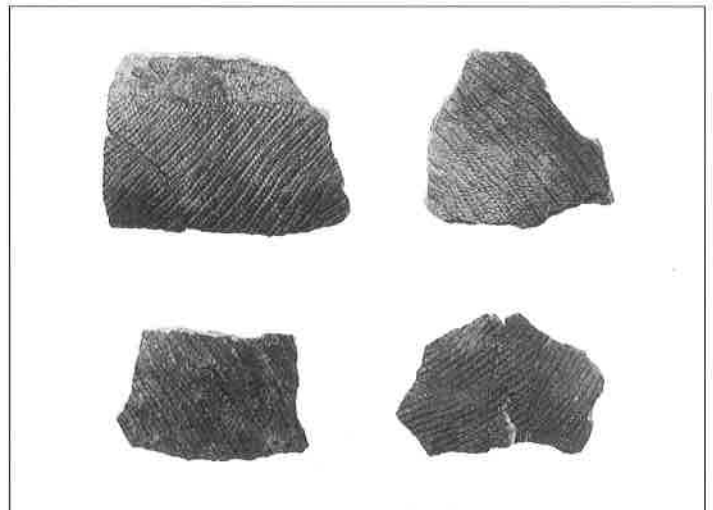
弥生時代は、集落が政治的な権力者のもとにまとまって小国を作っており、卑弥呼が治める邪馬台国もその一つだと言われています。

取手の弥生時代

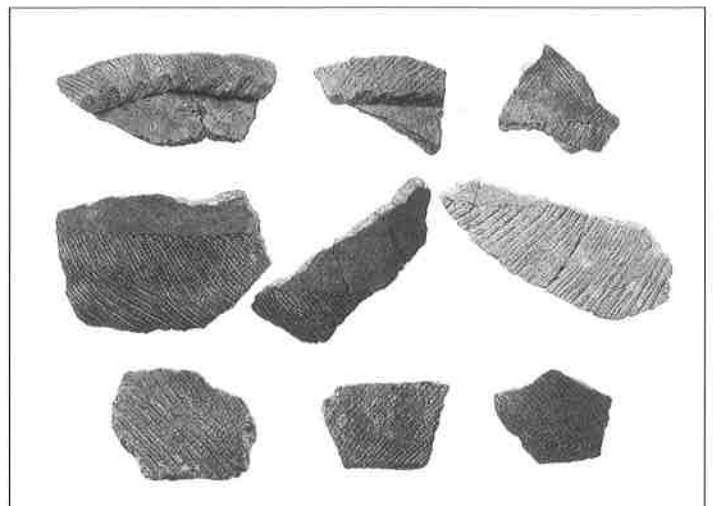
九州北部から発展していった弥生文化が現在の茨城県地方に伝わるのは紀元1世紀ごろと言われています。しかし、取手市では長い間弥生時代の遺跡は確認されていませんでした。そして、平成7年東原遺跡(野々井)と柏原遺跡(野々井)ではじめて3棟の住居跡を確認し、発掘調査することができました。2遺跡とも弥生時代の終わり頃(後期後半)のものとなりました。数少ないとはいえ、取手市に弥生時代、人が生活していた事実を伝える貴重な資料です。



弥生時代の住居跡 東原遺跡第2・3号住居跡 (写真 茨城県教育財団)



弥生土器片 東原遺跡第1号住居跡出土 (写真 茨城県教育財団)



弥生土器片 東原遺跡第2号住居跡出土 (写真 茨城県教育財団)

4. 古墳時代

古墳時代は古墳が築造された4世紀から6世紀頃をいいます。古墳は各地の豪族や首長の墓で、前方後円墳、方墳、円墳など特定の形に分類されます。

弥生文化にくらべ短期間に全国に広まっているため、古墳文化の波及は、大和政権の全国統一によるものとも考えられています。

また、分業が進み、製塩遺跡、玉作遺跡、埴輪窯など、職人集団の存在を示す遺跡が増加します。

土器は従来と同じ野焼きで作る土師器(はじき)と、大陸から伝わった登窯で焼く須恵器(すえき)の2種類が使用されはじめます。

取手の古墳時代

市内には2つの古墳群があります。3基の前方後円墳と13基の円墳が確認されている市之代古墳群(市之代)と、1基の前方後円墳と2基の円墳が確認されている糠塚古墳群(上高井)です。

双方とも埴輪をともなう古墳群で、市之代古墳群では馬形埴輪や人物埴輪、糠塚古墳群では人物埴輪や盾形埴輪など多数の埴輪が出土しています。

その他、2基の古墳と、10の遺跡で古墳時代の遺物を確認しています。その中で、発掘調査された遺跡は大渡Ⅰ・Ⅱ遺跡(野々井)、宿畑遺跡(稲)など4遺跡ありますが、全て古墳時代前期の集落跡です。中でも大渡Ⅰ・Ⅱ遺跡や大山Ⅰ遺跡(野々井)では、10棟以上の住居跡を発掘しています。



糠塚1号墳全景



土師器(上埴、下器台)
大渡Ⅰ・Ⅱ遺跡出土



円筒埴輪出土状況 市之代3号墳

土師器(甕型土器)
大渡Ⅰ・Ⅱ遺跡出土



5. 歴史時代

古代以降の文献をともなう時代を、総称的に歴史時代と呼びます。

歴史時代の調査には、文献と遺跡との比較検討によってより多くのことを解明し、お互いの不足部分を補いあうという利点があります。

国府や郡衙、寺院や城郭など、時代を象徴する遺跡が数多くある一方で、ごく一般的な集落跡の存在で文献に登場しない人々の生活を垣間見ることができます。

取手の歴史時代

奈良・平安時代の遺跡としては、集落跡の北中原遺跡(井野)、台宿二本松遺跡(台宿)などが調査されています。奈良・平安時代の一般的な集落は、それまでと同じく竪穴式住居に住み、土師器や須恵器などの土器を使っていましたが、文字が普及したため、土器に墨で文字を書いた墨書土器が見られるようになります。

市内の歴史時代の大きな遺跡には、戦国時代の城跡があります。大鹿城跡、下高井城跡など6遺跡が確認されていますが、残念なことに下高井城跡以外は開発・宅地化の波におされて、わずかに残った土塁や空堀を確認できるだけの状態になってしまいました。下高井城跡は下総相馬氏の高井治胤の城館と伝えられています。



左上 鏡・刀子
下高井向原遺跡出土
(写真 茨城県教育財団)

右上 墨書土器(深田) 北中原遺跡出土
左 小型坏大量出土土坑 台宿二本松遺跡